

---

## 看護専門学校における災害看護の授業実態と教員の災害看護教育への考え方

(関谷まり、日本災害看護学会 16(3):32-42, 2015)

2015年7月31日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

このレポートの目的は、災害看護の授業実態と看護専門学校の教員の災害看護への考え方を明らかにすることである。対象は、研究承諾得られた看護専門学校45校の看護教員150名である。内容として、災害看護の授業実態、災害看護教育への考え方である。

まず、対象についてである。対象者の属性として、教員の年齢、性別、看護師としての経験、看護教員としての経験および災害看護の授業経験の有無、勤務先の災害看護の授業時間や担当者についての項目を設定している。経験の項目について、「自分や同居の家族が直接災害を経験した」、「被災地に行って、現地の被災状況や生活状況をみた」、「医療活動やボランティアのために被災地へ行った」、「被災した親戚や知人などから現地の生活についての話を聞いた」、「医療現場やボランティアを行った人から、被災地の具体的な状況を聞いた」、「経験していない」であり複数回答を得て、もっとも多くを占めたのは「医療現場やボランティアを行うために、被災地へ行った人から被災地の具体的な話を聞いた」で、半数以上を占めている。逆に、教員の経験年別に関わらず、「被災地に行って、現地の被災状況や生活状況を見た」が10%代と最も少なかった。このことから、実際に被災地に赴く教員は少ないので、自分の経験に基づく話を学生にできないことから、自信をもって災害看護の授業を行うことができないという実態があると考察できる。

次に災害看護の授業の実態についてである。専任講師のみで担当しているケースと専任講師と非常勤講師が分担しているケースがほぼ同等で、非常勤講師に委ねるケースが最も多いようである。また、災害看護の授業経験の有無と災害ボランティア内容をみると、授業経験あり群に「避難所などの訪問看護活動」が多いことが認められた。

災害看護の授業に関する看護教員の考えについては、2011年に発生した東日本大震災を踏まえ、「できるだけ重視した方が良い」が約60%、「かなり重視した方が良い」が37%程度であり、かれはボランティアの経験の有無にかかわらず、95%以上の教員が災害看護の授業の重要性を訴えている。ここで、その講義内容についてである。「災害サイクルの各段階について」に関してのみ、授業経験の有無で有意な差が表れた。教員が災害看護を考えにくい理由を8項目から複数選択と自由記載で質問したところ、「災害看護の経験が不足している」が8割強、「演習が困難」が52%であった。やはり、恣意的に災害を経験することは困難であるし、演習も同様の理由で難しくそのように考える教員は多いようである。

災害看護の演習について、発災直後から急性期の看護演習に加え、被災者の生活を理解する中・長期的な看護演習について7項目で複数回答と自由記載をしてもらった。すると、カリキュラムに取り入れてよいと思う内容は、「災害現場の看護経験者から、具体的な体験談を聞く」が90%、ついで「避難所で暮らす人を想定した創傷固定」が65%、「段ボールなどを利用して、簡易トイレを作る体験」55%であった。演習の試みに対して、教員の考えについては、「中・長期的な生活支援を理解するための演習は、授業時間などが整えば、取り入れてもよい」51%、「取り入れるべきである」35%で合わせて86%もの教員が災害看護の演習を取り入れたいと考える一方で、災害看護の担当になった場合を想定し、トリアージや救急搬送などの急性期の対応の演習に加え、避難所や仮設住宅の生活を想定した演習を取り入れることは80%弱が困難だと考えており、その理由としては「教員の知識不足」が最も多く65%、「授業日数の確保が困難」55%、「演習を行う場所がない」38%、「適切な教材がない」32%の順であった。

以上のことより、災害看護を定着させるには、教員の経験不足の解消や、演習場所や設備の整備が重要である。また、カリキュラムとして授業時間数の確保や教員の知識不足を補うための支援を行っていけば、今後の定着がみられると考えられる。